

## 広島芸術学会十周年記念行事報告

昨年（平成八年）は、広島芸術学会が前身の広島芸術学研究会時代の五年間を含めて十周年を迎えた年であったので、さまざまな行事が行われた。

夏の大会は「芸術——未来へ」というテーマのもとに二日間にわたり研究発表やシンポジウムが行われた。その経緯について青木孝夫委員にまとめていただいた。

十二月の「10年の軌跡展」という芸術展示と作家によるシンポジウム「作家が語る——制作の現場」については実行委員長の入野忠芳氏にまとめていただき、また出品作家からのコメントを今後の参考のために掲載した。

また、夏の大会のプログラム（ポスター）と、冬の芸術展示とシンポジウムのリーフレットを巻末に添付した。

（編集委員会 文責 水島裕雅）

## 広島芸術学会十周年記念シンポジウムについて

青 木 孝 夫

創立第十周年を記念して開催された広島芸術学会の大会行事の中、主として二つのシンポジウムについて簡単な報告を試みたい。

広島芸術学会は研究者と市民と作家のへ藝術を核とする、多面的交流を一方に掲げ、他方で藝術を研究する学会として活動を開始し、十年の歳月を経た。その記念の大会に於いて「芸術学の100年」と題し、藝

術学の過去を反省し、現在を検討し、未来を展望することを課題として、その歴史的・理論的総括を試みた。

美学の普遍的形而上的特色に比べて著しく経験的色彩を帯びた藝術学の考察対象は、ある意味で世界中に及んでいる。しかし、この学の出自は紛れもなく西欧であり、西欧の歴史と文化の現実から切り離し難い。

学の理論枠や基礎概念や考察の実質的展開を考えてみれば、今なおこの学が西欧中心であること、西欧とその学的活動が思考と言説の参照枠であることは確かであろう。

その西欧の伝統の只中から藝術学の本質を捉えた研究報告 ●「かたちの論理―芸術学の100年―」（金田晋・広島大学・美学）並びに現在の地平から学の展望を試みた研究報告 ●「芸術学の現在―感覚・メディア・異文化からの見直し―」（岡林洋・同志社大学・美学）がなされた。この二つの報告を縦軸に、これに交錯する形で、若手研究者による三つの報告がなされ、記念大会の厚みが増した。即ち ●「コンラット・ランゲの美学理論」（清永修全・広島大学大学院・藝術教育） ●「ワイマール時代の機械音楽」（奥中康人・大阪大学大学院・音楽学） ●「二つの「根源」の近さと遠さ―フィードラーとハイデガーの間」（高梨友宏・帝塚山学院大学・美学）の三本である。

更に二つのシンポジウムが大会の主題を一層多様に織りなした。

藝術学の成立・発展した100余年は、当の学問や藝術現象をはじめ政治・経済や軍事を含む万般に於いて西欧中心主義また優越主義が貫徹した時空間であった。学問を含む文化文明の全域に渡り西欧を模範とすべき価値尺度を受容させるをえないのが、日本を含むその他の地域の宿命であった。非西欧的文化圏に於いて近代化が必然的に西欧化たらざるをえないことは、権利の問題ではなく事実上の課題であった。この点に關する了解は、今日、近代化やオリエンタリズムやコロナリズムの認

識を介していよいよ深まりつつある。「芸術学の現代」と題する二つのシンポジウムは、藝術学100余年の背後にある上記の歴史的文脈を踏まえている。

非西欧文化圏の文化は、美術を初めとして、西欧文化の基準に則って観念的・制度的に創出されてきた。「土着」の感性や「異文化としての美術」も西欧の抱く他者（≡異文化）に関する表象にあわせて作りなおされてきたのである。現時点に於けるこの種の認識には、100年以上に渡って営まれてきた―西欧文化の培った視線を植民地を初め非西欧文化圏での文化伝統に適用し、制度と意識を共に作り替える作業―過程への反省がある。作品を収集する〈美術館〉や歴史を叙述する〈美術史〉への批判的反省が良い例である。だが、西欧中心の文化表象の力学を問いなおすことは、批判や道徳的反省で尽きるものではなく、異文化交流のシステムを問うことである。シンポジウムII「芸術学の現代―異文化美術への視線」が扱ったのは、まさに以上の課題であった。

他方、シンポジウムI「芸術学の現代―メディアと観客・聴衆」では、〈日本〉という国家が、「文明開化」「富国強兵」という歴史的・政治的文脈に於いて、〈観客・聴衆〉という平等の四民つまり国民とその国民文化を生み出す近代化の諸相を検討した。その際、学校制度や雑誌・新聞やラジオ等のマス・メディアの発達を通し、「日本」の現実から遊離した）西欧舶来の藝術や制度が、「日本の伝統文化の観念的確立を表裏一体的に促しつつ、他方で〈演劇〉〈音楽〉〈体育〉等、多分に問題を孕む用語を日常生活に浸透させ、西欧とも土着とも異なるカテゴリーの下、新た

に日本の文化を築いていったことが重点的に論じられた。

以上のシンポジウムに参加・協力いただいたパネリストは以下の諸氏である。

シンポジウムⅠ「芸術学の現代―メディアと観客・聴衆」○青木孝夫  
(広島大学・演劇美学) ○樋口聡(広島大学・スポーツ美学) ○渡辺裕(東京大学・音楽美学)

シンポジウムⅡ「異文化美術への視線」○稲賀繁美(三重大学〔国際日本文化研究センター〕・比較文化) ○園府寺司(広島大学〔現在大阪大学〕・西洋美術史) ○千野香織(学習院大学・日本美術史) ○吉田憲司(国立民族学博物館・民族芸術学)

二つのシンポジウムに続いて全体討議の場が持たれた。両シンポジウムのパネリストが一堂に会し、水島裕雅氏(広島大学・比較文学)の司会で、会場との質疑応答が活発に行われた。ここでは、藝術・芸術学に纏わる異文化間の交流へ翻訳現象が、歴史性や政治や文化の権力機構を離れた客観的或いは無記的なものではなく、絶えず研究主体や市民によって基準や言説の姿勢が問われざるをえない状況、その状況が最早近代国民国家の枠を越えて資本の論理・広告の感性に浸透されつつあること、そしてこの状況から脱却するユートピアは存在しないながら、何らかの意味での望みそのものが歴史的状況の中で暗中模索されざるをえないことが改めて確認された、といつてよいだろう。

なお各発表・シンポジウムの合間に、会場には、中畝みのり(ヴァイオリン)と青山万知子(ピアノ)の両氏によるモンテ「チャルダッシュ

ユ」・バガニーニ「カンタービレ」他が艶麗に奏でられ或いは尹仁淑氏による韓国民謡の朗唱が響きわたり、聴衆は論議の合間しばし心を和ませたことを付記し、各発表者・パネリストと併せて謝意を表したい。

(あおき・たかお 広島大学)

